

#### 4 [タイトル] CPLを飲用している悪性卵巣腫瘍患者のQOLについて—ライフ・ヒストリーから—

○平吹 登代子<sup>1)</sup> 廣田 明子<sup>1)</sup> 本江 朝美<sup>1)</sup>  
村上 優<sup>2)</sup> 長戸 康和<sup>3)</sup>

昭和大学医療短期大学看護学科<sup>1)</sup> 東海大学医学部産婦人科学<sup>2)</sup> 東海大学医学部形態学<sup>3)</sup>

〔目的〕患者によって語られる生活歴などは豊かな感情に裏打ちされている。患者がそれを語り、聞いてもらうことは治療的またはそれ以上の意味があり、援助者には、患者をひとりの人間として全体的に理解するための視野の拡大を促進する。調査面接の場を治療的な場とし、ライフ・ヒストリーを分析することによって、代替医療に対する選択性の高い患者の傾向を探る。

〔方法〕対象は、本江の「CPLを飲用している悪性卵巣腫瘍患者のQOLについて—QOL評価表と語りの分析から—」と同じ。方法は、本江らとともにQOL評価表による評価と面接調査を行ない、録音したテープを全逐語録を作成した。CPL飲用状況、現疾患への構え、家族背景、飲用前までの生活歴についてを検討した。

〔成績〕CPL飲用前は一生懸命飲んでみますと意欲を示し、効果が現れるとどんどん宣伝したほうがいいですよと確信を持ち、毎回飲用時には「効いてくれよ」と念じながら飲んでいる。

現疾患に対して、告知直後は泣き疲れるほど泣き徐々にあきらめ、母親の生きた年齢（85才）まで生きられるかなあと目標を見いだす。

幼少時には母に可愛がられ、長じて相性が合う夫に出会い、結婚以来老後まで、夫にこまやかに世話を受け、人生を通して家族に恵まれる。また未熟児として生まれ体格的には恵まれないが生命力が旺盛で、ご飯をいただかなくてもお酒落がしたい等主体的でライフスタイルが確立している。

〔結論〕CPL飲用に対する選択性の高い患者の傾向をまだ論じることはできないが、この患者は代替医療に積極的な意欲を示し、プラシーボ効果が高く主体的で自分のライフスタイルが確立していた。ライフ・ヒストリーの数が増えて多様化すると特定の規則的要素が現れ仮説が立てられる（ベルトー）